



岩波文庫

1435

西の方の人
續西の方の人

他二篇

芥川龍之介著

岩波書店

岩波文庫

1435

昭和十二年二月一日印刷
昭和十二年二月五日發行
昭和十二年十二月二十日第二刷發行

西方の人續西方の人他二篇 ★

定價二十錢

(覆本製本)

著者

芥川龍之介
あきたがは りゅうのすけ

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七・〇〇一八八
九段 〇〇一八九・〇〇一八八
一〇二二番(小賣部専用)
振替口座東京二六二四〇番

岩波文庫

1435

西の方の
西の方の
人

他二篇

芥川龍之介著



岩波書店

目次

西方の人……………	五
續西方の人……………	五三
十本の針……………	八一
或舊友へ送る手記……………	九一

奇矯に對する倫愛は、他人の模倣者たることを欲せずして
凡かたの如く人子として見られたいとせず、論議の執である。
けれどもさうして他人は凡かたの如く人子として見えずに却て屢
珍妙白人と名づかる過を犯し、^{此は如何}他人は見えぬ山を山と目
の既覚をもちて活し、また見えぬ山を主張し自らを山と見せぬ
あり、奇矯といふ邪體は、むしろ奇矯が身をもつて
おぼしむる可いとし、^{さうして}また自らを山と見せぬ山は、
格別鬼の考場合ひの考場合ひに似てゐる。奇矯なるものは、
うけとるべきのは、通俗の考場合ひに似てゐる。考場合ひの考場
合ひに似てゐる。だが後者の場合にも、^{さうして}安全確
定なものは、^{さうして}安全確

賢向ありては淺薄な鈍愚として、或は深遠な
新進の人なりば、或は此の如く、或は此の如く、
たゞのこゝなり。

仁一六九

志は日清しやて、その言、其の心、二人の美、一の力、強、又
者、上、善、の、こゝろ。其の心、その言、其の心、その言、其の心、
し、ず、と、新、強、あ、し、講、修、の、氣、持、の、こゝろ。心、に、流、水、の、こゝろ。
西方の人
カ島政二即今所執之

苟卿者、是方異流而不讓。者、為論而不讓者也。
其言、易、人、之、所、難、言、也。亦、人、之、所、難、言、也。子思、孟、則
其、之、所、難、言、也。苟卿、性、日、亂、天、下、者、也。
孟、則、也。……意、其、亦、人、也。則、使、不、避、而、自、許、大
過。……苟卿、特、性、一、性、之、論、不、有、知、其、禍、之、至
能、此。

蘇東波 苟卿論

1 この人を見よ

西　わたしは彼是十年ばかり前に藝術的にキリスト教を——殊にカトリック教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせ●拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはキリスト教の爲に殉じたキリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を與へたのである。わたしはやつとこの頃になつて四人の傳記作者のわたしたちに傳へたキリストと云ふ人を愛し出した。キリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない。それは或は紅毛人たちは勿論、今日の青年た

ちには笑はれるであらう。しかし十九世紀の末に生まれたわたしは彼等のもう見るのに飽きた、——寧ろ倒すことをためらはない十字架に目を注ぎ出したのである。日本に生まれた「わたしのクリスト」は必しもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと實のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。従つてわたしは歴史的事實や地理的事實を顧みないであらう。(それは少くともジアナリストの方イツクには困難を避ける爲ではない。若し眞面目に構へようとするれば、五六冊のクリスト傳は容易にこの役をはたしてくれるのである。) それからクリストの一言一行を忠實に擧げてゐる餘裕もない。わたしは唯わたしの感じた通りに「わたしのクリスト」を記すのである。嚴しい日本のクリスト教徒も賣文の徒の書いたクリストだけは恐らくは大目に見てくれるであらう。

2 マリア

マリアは唯の女人にょじんだつた。が、或夜聖靈に感じて忽ちクリストを生み落した。

西 我々はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。同時に又あらゆる男
方 子しの中にも——。いや、我々は爐に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や巖がん疊たかに出
の 來た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。マリアは「永遠に女性なる
人 もの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。クリストの母、マリア
の 一生もやはり「涙の谷」の中に通かよつてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一
生を歩いて行つた。世間智と愚と美德とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。
ニイチエの叛逆はクリストに對するよりもマリアに對する叛逆だつた。

3 聖靈

我々は風や旗の中にも多少の聖靈を感じるであらう。聖靈は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖靈に方方 Demon の名を與へてゐた。のみならずいつもこの聖靈に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖靈の子供たちは——あらゆるクリストたちは聖靈の爲にいつか捉はれる危険を持つてゐる。聖靈は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異なるものである。我々は時々善惡の彼岸に聖靈の歩いてゐるのを見るであらう。善惡の彼岸に、——しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖靈の歩いてゐるのを發見してゐた。

4 ヨセフ

クリストの父、大工のヨセフは實はマリア自身だつた。彼のマリアほど尊まれないのはかう云ふ事實にもとづいてゐる。ヨセフはどう最^{ひいさまめ}貞目に見ても、畢竟餘計ものの第一人だつた。

5 エリザベツ

マリアはエリザベツの友だちだつた。バプテズマのヨハネを生んだものはこのザカリアの妻^{夫原}、エリザベツである。麥の中に芥子^{けし}の花の咲いたのは畢^{つひ}に偶然と云ふ外はない。我々の一生を支配する力はやはりそこにも動いてゐるのである。

6 羊飼ひたち

西　　マリアの聖靈に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騒がせるほど、醜聞だつたことは確かである。クリストの母、美しいマリアはこの時から人間苦の途みちに上り出した。

人の

7 博士たち

11　東の國の博士たちはクリストの星の現はれたのを見、黄金わうごんや乳香にゅうかうや没薬もつやくを寶の盒はこに入れて捧げに行つた。が、彼等は博士たちの中でも僅かに二人か三人だつた。他の博士たちはクリストの星の現はれたことに氣づかなかつた。のみならず氣づ

いた博士たちの一人は高い臺の上に佇みながら、（彼は誰よりも年よりだつた。）
きららかにかかつた星を見上げ、はるかにクリストを憐んでゐた。

「又か！」

8 ヘロデ

西 方

人

ヘロデは或大きい機械だつた。かう云ふ機械は暴力により、多少の手数を省く
爲にいつも我々には必要である。彼はクリストを恐れる爲にベツレヘムの幼な兒
を皆殺しにした。勿論クリスト以外のクリストも彼等の中にはまじつてゐたであ
らう。ヘロデの両手は彼等の血の爲にまつ赤になつてゐたかも知れない。我々は
恐らくこの両手の前に不快を感じずにはゐられないであらう。しかしそれは何世
紀か前のギロティンに對する不快である。我々はヘロデを憎むことは勿論、輕蔑

することも出来るものではない。いや、寧ろ彼の爲に憐みを感じるばかりである。ヘロデはいつも玉座の上に憂鬱な顔をまともにしたまま、橄欖や無花果いちじゅくの中にあるベツレヘムの國を見おろしてゐる。一行の詩さへ残したこともなしに。……

9 ボヘミア的精神

幼いクリストはエジプトへ行つたり、更に又「ガリラヤのうちに避け、ナザレと云へる邑むら」に止とどまつたりしてゐる。我々はかう云ふ幼な兒を佐世保や横須賀に轉任する海軍將校の家庭にも見出すであらう。クリストのボヘミア的精神は彼自身みづかみの性格の前にかう云ふ境遇にも潜んでゐたかも知れない。

10 父

西
方
の
人

クリストはナザレに住んだ後、ヨセフの子供でないことを知つたであらう。或は聖靈の子供であることを、——しかしそれは前者よりも決して重大な事件ではない。「人の子」クリストはこの時から正に二度目の誕生をした。「女中の子」ストリントベリイはまづ彼の家族に反叛した。それは彼の不幸であり、同時に又彼の幸福だつた。クリストも恐らくは同じことだつたであらう。彼はかう云ふ孤獨の中に仕合せにも彼の前に生まれたクリスト——バプテズマのヨハネに遭遇した。我々は我々自身の中にもヨハネに會ふ前のクリストの心の陰影を感じてゐる。ヨハネは野蜜や蝗を食ひ、荒野の中に住まつてゐた。が、彼の住まつてゐた荒野は必しも日の光のないものではなかつた。少くともクリスト自身の中にあつた、

薄暗い荒野に比べて見れば……。

11 ヨハネ

西　　パプテズマのヨハネはロマン主義を理解出来ないクリストだつた。彼の威嚴は荒金のやうにそこにかがやかに残つてゐる。彼のクリストに及ばなかつたのも恐らくはその事實に存するであらう。クリストに洗禮を授けたヨハネは櫟かしの木やうに逞しかつた。しかし獄中にはいつたヨハネはもう枝や葉に漲つてゐる櫟の木かしの力を失つてゐた。彼の最後の慟哭はクリストの最後の慟哭のやうにいつも我々を動かすのである。――

「クリストはお前だつたか、わたしだつたか？」

15　　ヨハネの最後の慟哭は――いや、必しも慟哭ばかりではない。太い櫟の木は枯